

戸畑に残る赤煉瓦の煙突

# 戦争と私

下村タミ子

戦争と私

下村夕三子

目次

はじめに

..... 1

一、学童疎開

..... 2

二、増田飛行場建設への動員始まる

..... 4

(一) 増田の飛行場

(二) 増田飛行場へ

(三) 食事

(四) 風呂焚きのおじさん

(五) 蚤と虱

(六) 守衛室にて

(七) 作業場へ

(八) 戦跡をたずねて(増田飛行場周辺)

三、西之表の大空襲

..... 15

四、集団自決の場所になったかも知れない

..... 17

五、にわ俄看護婦

..... 19

(一) 俄仕立ての看護養成

(二) 看護婦代理として

六、戦時中に受けた教育

..... 24

(一) 国民学校では

(二) 女学校では

(三) 歌ったうた・標語

(四) 部落(集落)や家庭では

七、終戦とその後

..... 29

(一) 終戦の日

(二) 家族のこと

終わりに

..... 34

発刊によせて

..... 36

## はじめに

「日本国は無条件降伏す」

と言う張り紙を見て唯、呆然となった時から数えて今年は七十年となります。

終戦の時私は女学校の四年生でした。

生まれた翌年（一九三一年）に満州事変、国民学校の二年生の時（一九三八年）に支那事変（日中戦争）、六年生の十二月八日には大東亜戦争（太平洋戦争）が勃発したため、一九四五年の敗戦までの十五年間は戦争の真っ直中にいた事になります。

戦時中の教育の中にあつては、軍国少女となり「何故」という疑問すら抱くことはありませんでした。

戦争が終わりこれまでの軍国主義から自由主義、平和主義へと変革し七十年の時は流れてきています。そしてあの戦争の悲惨なことをさへ消えようとしています。しかし私の心の中からは戦争という言葉さえ消すことが出来ないまま年を重ねて参りました。

「このままではいけない」という思いから、学校や集会等で戦争体験を語ってきました。しかし音声の言葉は時を経て消えると思ひ、戦後七十年の節目の今年、活字の言葉として書き残したいと思ひました。

生死を彷徨われた方々の体験に比べたら私の体験など小さな事かも知れませんが、種子島でもこんな戦いや銃後の守りがあつた事を知っていただきたいと思ひます。



## 一、学童疎開

昭和二十年（一九四五年）戦況は益々不利となって、本土への空襲もあり、沖縄への上陸も始まりました。そこで国は国民学校の二年生から六年生までの児童を安全な地域に疎開をさせる事にしたのです。

子どもは、次の世代を担う大切な命、生きのびてもらわねばなりません。一方では、戦場となれば足手まといになるからとも言われました。

私の妹は当時国民学校の五年生、母は自分の丈夫そうな帯を夜通しかかって解き、背のうを作ってやりました。そして限られた数の蚊帳の中から一番良いものを選んで妹に持たせてやりました。今の種子島中学校の南の丘に馬の監検場があり、その広場に集合し夜を待つて密かに出港しました。

生きて再び会うことはないであろう別れは本当につらいものでした。無事に鹿児島へ着いた児童は各々の疎開地へ別れて行きました。その後の疎開児童の難儀や苦しみは詳しく記すことは出来ませんが、疎開先で赤痢にかかって亡くなった人や、帰島の折り発動船が流されて死ぬ思いをしたことなど、正に生き地獄そのものだったようです。

疎開先は学校によって違っていましたが、主に大口方面、伊佐方面であったようです。学童疎開と言えば、大へん悲しい出来事の一つ、地上戦となった沖縄から本土へ向

かっていた対馬丸が米軍の魚雷を受け沈没し、一五〇〇人もの児童・引率者が海の藻屑と消えてしまった事でした。

ぢろの会に語るは戦争悲話のこと

学童疎開に竹槍の訓練

帰島する船は流され疎開児ら

体結び合い死を待ちしとか

## 二、増田飛行場建設への動員始まる

### (一) 増田の飛行場

資料によりますと、昭和十七年（一九四二年）一月飛行場建設予定地周辺の住民へ移転命令が出されたそうです。その地区へ住んでいた私の友は、こう話してくれました。当時、小塩屋集落は十戸ほどの戸数があった。移転は突然の話であって、一週間以内に移らねばならず、移転先のなかった友の家族は、父の勤務先の用務員室で数ヶ月近く暮らしたそうです。

その後昭和十七年（一九四二年）八月に種子島航空基地（増田）工事が着工されました。昭和十九年（一九四三年）八月には「学徒勤労令」が出され、旧制の中学校、女学校の生徒も動員へかり出されるようになりました。

### (二) 増田飛行場へ

増田への移動はトラックの荷台に乗って行くのです。ガタゴト道で跳ねる度に尻を打ち痛いものでした。

或る夏の動員の時、浜津脇の坂を登り始めた時、爆音が聞こえてきました。誰かが「空襲警報」と叫んだので、みんなはトラックが止まるのも待ちきれず荷台から飛び下

りそこら辺の藪の中へ隠れました。

しばらくじっと息を潜めていると、又誰かが、

「友軍機じゃったろう。出てこいやー。」

みんなはモンペの埃を払いながらトラックに乗り、増田へ向かったこともありました。

### (三) 食事

食事は飯と汁だけ。飯は麦飯。今で言えばヘルシーではないかと思うかも知れませんが、とにかく黒い飯。汁ときたら、生野菜など入っていない。粉味噌に干し葉の野菜が二・三枚浮いているだけだった。それでも腹が減っているので、汁も全部飲み食器の底をなめるようにして食べていました。

家から、梅干しや油味噌など誰もが持参していたので助かりました。

おやつは、こずき（はったい粉）で、休憩時間にはそれを食べて水を飲むのです。粉を口いっぱいに入れたまま笑ったり、くしゃみをしたりすれば、粉がパアーツと吹き出してあわてるものでした。



(四) 風呂焚きのおじさん

私たちの宿舎は工員の人達と同じで、海の近くの川が流れている場所にありました。広い広い敷地に沢山の宿舎や守衛所などが並んでいました。

川の近くに風呂場があり、その風呂焚きのおじさんが朝鮮の人だったので。おじさんと言うよりもおじいさんに近く、温厚そうな人だったので話しやすかったです。しょう。夕食後の暇をみつければ、そのおじさんの所へ行き、アリランの唄を歌ってもらいました。

「アリラン アリラン アラリヨ

アリランコーゲロ ノムカンダー」

その時だけ静かでした。空気が流れました。おじさんは、故郷の山河を思い浮かべながら、心の中では泣いていたのではないのでしょうか。今にして思うことです。

アリランの唄歌ひくれし朝鮮の

翁も戦後をいかに生きしか

(五) 蚤と虱

宿舎に風呂はあったのですが、動員中一回も入った覚えがないのです。宿舎の毛布には沢山の蚤がいて私達を悩ませました。血をたっぷり吸った蚤を朝捕るのが仕事の一つでもありました。

蚤以上に困ったのは虱の存在でした。夏場は少しは我慢しましたが、冬の動員が大変でした。

下着のシャツなどに虱がつき、その上縫目などの中にびっしりと小さい小さい卵を産み付けているのです。虫眼鏡で見ないと分からない様な卵でしたから、動員から自宅に帰って先ずする事は、着ている服、持って行った衣類をすべて出し、大きな鍋に入れて煮らなければならなかったのです。

それは何時も母の仕事でした。

戦後学校で虱退治にDDTを容赦なく児童の頭に振りかけてやった事と重ねて思い出されます。

学後動員の宿舎の夜は星眺め

別れのブルース歌ひしは遙か

(六) 守衛室にて

私達の宿舎の前の少し離れた所に、守衛室の建物がありました。夕方になるとよく眼にした光景が今も心を痛める思い出の一つです。

夕食までの時間は呆つと窓の外を眺めることが多かったのですが、今日は何もないようにと守衛室の方へ眼をやると、十人位の仕事着のままの男の人達が並んでいるのです。守衛の人が大声で怒鳴ったかと思うと、平手でバチバチとその人達の顔を叩いてゆく。倒れるまで叩くのです。

「アイゴー、アイゴー」

悲しげなああの声が今も耳の底に残っています。

(七) 作業場へ

朝は薄暗い内に起床、広場に徴用の人達も一緒に集合して点呼がありました。

「種子高女第一班十名、異常なし」

大声で報告するのです。

その後海軍体操。指揮をとるのは海軍の兵隊さんでしたが、その掛け声が面白くてよく真似をしたものでした。

食事がすみ準備を整えたら、班毎に隊列を組み飛行場へ続くだらだら坂を登って

行くのです。

見よ東海の 空あけて

旭日高く輝けば

天地の正氣 潑刺と

希望は踊る おちやしま 大八洲

おお清朗の 朝雲に

聳ゆる富士の 姿こそ

金おう無欠 揺ぎなき

わが日本の 誇りなれ

歌と共に足並みも揃えながら歩いて行きました。

坂の入口の辺りには、小屋らしき家が五・六軒あって入口には筵むしろが下げてありました。作業から帰るころは、小屋の前で七輪の火をパタパタと団扇で煽いでいるおばさんの姿がありました。鍋の中の物は何だったのでしょうか。

朝鮮の人も沢山働きに来ていましたから、家族ぐるみの人もいたのでしょうか。

私達の仕事は、掩体壕造りでした。掩体壕とは、敵の空襲から飛行機を守るために



造られたものです。今でこそ重機がいっぱいあり、掩体壕の一つや二つはすぐ造れるかも知れませんが、当時は何もありません。発破で山を崩した土を人力で運ぶのです。その運び役が私達の仕事でした。二人一組で竹で編んだ畚もっこに土を入れて運ぶのですから、知れた事、そんなに仕事は捗りません。来る日も来る日も畚持ちで手にはまめが出来ていました。



飛行場の司令室の入口

作業中に飛行機が飛来した事はありませんでしたが、終戦時には特攻に使われた零戦戦闘機四機が掩体壕周辺に残っていたそうです。不時着した特攻機だったのかも知れません。エンジントラブルで不時着した飛行機は、修理がすんだら再び沖縄目指して飛び立ってゆかれたのだそうです。

現在、飛行場の跡は広々とした畑地となり、オーギ(砂糖黍)やさつま芋の栽培地となっていますが、あちこちで戦時中の遺構が見られます。

#### (八) 戦跡をたずねて(増田飛行場周辺)

昨年の夏休み、現職の教職員の行事に参加をさせてもらいました。

徴用工員や私達の宿舍の跡がどうなっているのか、どうしても見たかったからです。勿論当時の姿など何も残っていませんでしたが、宿舍の横に流れていた川は変わりました。宿舎の跡地は一面の田圃になり、収穫の後で雑草が生えていました。

#### 七十年経ても変わらぬ山と川

#### 宿舎の跡地にアキアカネ飛ぶ

#### 国道を黄色に染めて特攻花

#### その名の由来知りて切なし

砲台の跡は太平洋を望む崖の中腹にあるのだそうですが、危険なため近づけませんでした。海辺から見たら、穴の様なそれらしき跡は見る事が出来ました。敵艦めが



飛行場跡地に建つ石碑

「九州海軍航空隊種子島基地之碑  
裏には碑文がありました。」

源田 實書

「碑文」

昭和十六年十二月八日我が聯合艦隊は真珠湾を攻撃し大東亜戦争に突入した。翌年十月日本海軍は増田牛之原に飛行場を建設することになった。熊毛郡民は 徴用を受け空襲と食糧難に堪えあらゆる困難を克服してこの建設に奉仕し小型機の発着を見るに至ったが間もなく終戦を迎へ建設工事は中止となった。

中種子町在住海軍出身者は建設に従事した人々の偉業を永遠にたたえ滑走路南端にこの碑を建てる。

昭和五十年五月二十七日

中種子町櫻会

土地提供者 岩屋 昭夫  
 石碑寄贈者 徳永 実友  
 元隊長海軍少佐 西園 善助

けて発砲することはなかったと思います。作戦室になっていた壕は私有地になっていましたが、特別に見学が出来ました。天井が低くセメントを厚くした壕で中は唯真っ暗でした。中でどんな作戦が練られていたのでしょうか。知る由もありません。唯一つ当時の姿のまま残っているのが戸畑の赤煉瓦の煙突です。銃撃を受け弾痕跡が痛ましく見られますが、多くの事を見てきた飛行場建設の生き残りの建物であります。

### 弾丸の凹みに春の陽をうけて

#### 跡地に残る煉瓦の煙突



元、滑走路の南の端の桜の木に囲まれた辺りに大きな石碑が建っています。黒ずんでいましたが文字ははっきり読みとれました。正面には、



空襲警報で防空壕へ真つ暗な中を走って入った事がありました。その夜は壕の中で毛布にくるまって休みました。このころは、増田の沖の辺りには、敵艦が出没していたとか。後で聞いた話です。この壕の跡も見たかったのですが、今回は分かりませんでした。

戦跡を巡れば飛行場跡に建つ

石碑は桜の花に抱かる

暗闇の壕にて眠る乙女らは

テートの夢など見るころなのに

### 三、西之表の大空襲

種子島への空襲は昭和二十年（一九四五年）の三月十八日を皮切りに、四月二十四日までの間に四回の空襲を受けました。

この間に旧制種子島中学校は全焼、学校に駐屯していた兵隊さんが焼死しました。焼夷弾の降下により西町、東町の中心部が丸焼けとなりました。

その頃私達は増田へ動員で留守でした。友人の中には東町の人が出て、その話を聞いた友は泣きぐずれましたが、何と慰めていいのかわかりません。一緒に泣きたいくらいでした。彼女は私達より先に帰って行きました。案の定家は焼けていましたが、ご両親は無事でした。

幸い私の家は市街地より離れた木々に囲まれた中野部落でしたから、少しは気が楽でした。それでも空襲警報のサイレンが鳴る度に壕に



旧種子島中学校の正門と中学生



入るのは大変だったので、壕の中でよく寝ていました。  
照明灯の降下で暗闇がパァーッと明るくなる事が度々ありました。又、機銃掃射で竹に当たった玉の音がバラバラとすることもよくありました。



現在の鍋割



鍋割の杉山



誠の碑

#### 四、集団自決の場所になったかも知れない

種子島にも沢山の兵隊さん達が来ていました。

沖縄の地上戦は益々激化し、この次は種子島かと思われるころ、中野部落全体で鍋割と言う奥地の大山の中に各々が藁を背負うて行ったことがありました。

「いよいよと言う時は、みんながこけ集まって最後を迎える所じゃな」

大人の方が言いましたが、誰も何も答えませんでした。私は、「ここまで来る事はもうなか」と思いながら背中の中の藁を下ろしました。帰りは四里(十六キロ)以上の道程を唯、黙々と家路につきました。

敗戦に軍旗焼きにし丘に建つ

「誠の碑」の辺をアキアカネ舞ふ

死を決し藁を運びし鍋割も

道の拓きて 車の通る

## 誠の碑

号鋒第一三五七三部隊の六〇〇名の戦友が「島民との心の絆と平和希求」の証として昭和二十年の終戦時この地において大隊旗を焼きながらこの巨岩に「誠」の文字を刻したものである。

「石誠会」

生命かけて鳥を守りしますらおの

誠の心永久に讃えむ

斯くてわがふるさとの山川はあり

人々よ共に平和を讃えむ

この峰もあの峰も鳥を守る

とりでなりしよ大東亜戦争

この看板は「戦争と種子島」企画展を記念して同実行委員会により平成十九年八月に設置された。(その中より)

## 五、（五）俄看護婦

### (一) 俄仕立ての看護婦養成

終戦前の五月・六月・七月は女学校の校舎にも陸軍の兵隊さん達が入っていました。生徒は皆自宅待機でしたが、私達四年生だけは臨時に呼び出され看護の勉強を受けることになりました。

戦況はもう先のない状態でしたから、種子島も戦場となる覚悟の上だったのでしよう。

先生は軍医さん。軍医さんと言っても、学徒動員の医学生でした。

学習内容は主にすぐ役立てる実践編ばかりでした。

・包帯の巻き方

・注射の仕方

・消毒の仕方

・手術の際の止血する時に使うペアン・鉗子の渡し方など

医学を志半ばにして動員された教壇の先生も、青春真っ直中の一人の青年だったのでしよう。或る日かねてより柔らいだ顔で、

「君たちに恋のささやきの事を教えようかな。それは、鮎の笹焼きと同じだよ。

どちらから焼いても良いのだ。表裏は無し。」

と言いながら鮎の絵を黒板に描いてくれました。その時は分かった様な分からない様な気持ちでしたが、仄かな憧れは抱いていました。





古田校舍全景 古田尋常高等小學校増築記念写真

(二) 看護婦代理として

古田国民学校に、島の陸軍守備隊の中の衛生隊が駐屯していました。

看護の実践授業を受けた私達は八班くらいに分かれ、古田の衛生隊への動員が始まりました。私は第一班だったので六人(はつきりしない)の友と古田上ノ町の榎本貞彦さんの広い家に宿泊させてもらい、古田の国民学校へ通いました。校舎は古い木造で教室も沢山はありませんでした。校庭にはあちこちに天幕が張ってあり、兵隊さん達が忙しそうに動いていました。戦争と言う緊迫感を感じられませんでした。或る日急に呼び出され、校庭の東に張られた天幕に連れてゆかれました。中には長い白い台が置かれてあり、その上には体格のよい兵隊さんが横たわっておられました。

軍医さんの指示に従い、足の軍服を切りはな

して、それからのことは必死で軍医さんのおっしゃる通りにしたただけで、しっかりとした記憶は残っていません。気が付いた時は足が馬穴の中にドラツとあったことだけが鮮明に思い出されます。

この手術の後、左腕を切断された海沼さんと言う女性の看護に当たりました。教室の床に薄い布が敷いてあり、麻酔の切れかかった海沼さんが、

「ここに蠅が止まっているから。止まっているから。」

と何回も言われた。汗もびっしょりかいていらっしやったので、団扇で必死になって扇ぎました。教室の窓は中窓でしたから八月の暑い最中、風など少しも入って来ませんでした。

この頃、中種子、南種子の女学生(四年生)は、野間国民学校が司令部になっていた。そこに動員されました。その友から聞いた話では、司令部の兵隊さんや軍属の職員さんそれに学徒動員の皆さんで、熊野神社へ武運祈願のため参詣の途中で機銃掃射を受け、負傷された方が〇〇曹長さんと海沼さんだったということが分かりました。

戦後六十五年(今から四・五年前)、海沼さんの娘さんがあの思い出多い増田に住んでいらっしやると聞き、電話をして話したことがありました。古田の衛生隊で手術を受けた話はお母さんから聞いたことがあったそうです。お母さんはしばらく種子島に





現在の古田小学校

いらしたそうですが、高齢になり大阪の息子さんの所へ行き、もう亡くなられたと話して下さいました。

思いがけない事だったので、とっても嬉しかったです。時々当時の頃を思い出し、あの人、この人はその後どんな人生を送られただろうか。と置いていた一人の消息が分かったので……。

鳥に在りて機銃掃射に腕失くせし

海沼さんの消息を知りぬ

衛生隊での仕事のひとつで、使用したガーゼや包帯を洗わなければなりません。当時は物資の不足が当たり前でしたから、どんな小さなガーゼでも捨てるわけにはいきませんでした。血や膿の付いたガーゼ、中にはガーゼの隙間に蛆むしがわいていることもあり、慣れるまでは大変でした。

幸い学校のすぐ近くに川が流れていたのです、そこへ持って行って洗ったから、そんなに汚いとは思いませんでしたが、それでも初めの頃は指先でつまんで洗ってました。湯いたガーゼや包帯を畳んだり、煮沸したりもしましたが、その外何をしたのかはつきりと思いません。

空蒼く流れは清き山間の

学び舎今は戦いくさの跡なし

人氣なき山の学校に風の来て

ふらここ一つを静かに揺らす

## 六、戦時中に受けた教育

### (一) 国民学校では

・一年生の教科書はいきなり

ススメススメ

ヘイタイ ススメ

(挿し絵は鉄砲を持った

兵隊さん)



奉安殿

・音楽は爆音の聞き分けでした。

・国民学校四年生の時「紀元二千六百年」の記念行事がありました。

・宮城遥拝と奉安殿への拝礼は欠かせませんでした。

### (二) 女学校では

・英語の授業がなくなりました。

・食糧増産で農業の授業が多くなりました。

・必勝祈願で上西の伊勢神社への参詣がよくありました。

・竹槍の訓練や空襲警報時の訓練がありました。

・四年生の時は教科書を開いて勉強することはありませんでした。卒業前に附属幼

稚園が設置され、そのの實習が少しだけあって、子ども達と遊びました。

・演劇「八板金兵衛」を西町の公民館で一般公開しました。私は金兵衛の役でした。

・二月の紀元節の前後だったか。馬毛島沖で輸送船団が撃沈され、沢山の兵隊さんの死体が流れ着かれたことがありました。幾晩もかけて今のわかさ公園の下の辺りで茶毘に伏され、黒煙の立ち上るのを遠くから見たいこともありました。

教室の床に新聞紙を敷き、この兵隊さん達の遺留品の整理を行ったことがありました。どの遺留品の中にも必ず家族の写真が入っていて悲しくて悲しくてなりません。幼い子ども達の笑顔が多くありました。その子ども達も戦死したであろう父の姿を思い浮かべながら、立派な大人になっておられる事と思います。そして「戦争だけはしてはならない」と堅い心で生きてこられたことでしょう。

### (三) 歌ったうた・標語

海ゆかば

海ゆかば 水漬く屍



昭和17年女学校の友人達と



山ゆかば 草むす屍  
大君の辺にこそ死なめ  
顧みはせじ

この歌は好んで歌ったわけではないのですが、集会などでよく歌わされました。その他軍歌は露營の歌（勝ってくるぞと）、麦と兵隊（徐州徐州と）、出征兵士を送る歌（わが大君に召されたる）、太平洋行進曲、大東亜決戦の歌、父よあなたは強かった、まだまだあるのですが思い出せません。

密かに歌っていたのは、淡谷のりこのブルースやゴンドラの歌などでした。標語は古びた家の壁などにべたべたと張ってあったし、集会などではよく語られました。

- ・打倒 鬼畜米英
- ・富国強兵
- ・欲しがりません勝つまでは
- ・産めよ増やせよ
- ・贅沢は敵
- ・一億総動員
- ・銃後の守り
- ・壁に耳あり障子に目あり
- ・武運長久
- ・一億総決戦
- ・パーマネントは止めましょう

などがありました。面白がって節をつけて歌ってあるくこともありました。

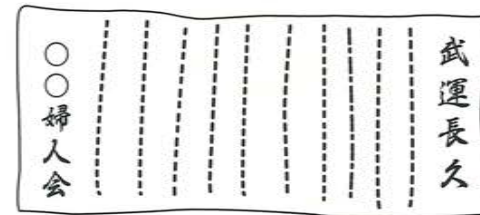
デイケアの嬸は涙滲ませて  
「露營の歌」を歌ひ始むる

(四) 部落（集落）や家庭では

- ・慰問袋を作りました。（中には石けん等の日用品と慰問文）
- ・町角に立って、白い晒の布に一針一針縫ってもらう千人針を作りました。
- ・武運長久祈願の神社参りを母さん達がよくしていました。
- ・家庭にある鉄製の品物の供出をさせられました。
- ・品物を買うのには切符制でした。
- ・配布された切符を持って日用品を買わなければならなくなりました。買おうにも、品物がすべてあるわけではありません。



- ・学校へ持って行く弁当は、籠の中なかから芋と漬物だけ、それが昼食でした。
- ・学校へ行く時の履物は草履ぞうりか裸足はだしで、雨の日は大変たいへんでした。
- ・徴用制ていようせいがあり強制的に動員どうぎんされ働はたらかされました。
- ・防空頭巾ぼうくうずきんは放はなすことは出来できませんでした。



千人針



## 七、終戦とその後

### (一) 終戦の日

私は衛生隊の動員を終え自宅待機で自分の家にいました。ラジオでの大本營の発表を聞くために、何時でも電源は入れっ放しにしてありました。

八月十五日は重大なニュースがあると言うので気を付けていたのですが、ラジオの音声が悪くよく聞きとれませんでした。でも、言葉の端はしばかりから、どうも戦争は終わったらしい。「馬鹿なそんな事があるもんか」私は切れかけた草履をつっかけて警察方面へ走って行ってみました。

町の様子や人の様子など全く目には入りませんでした。そして今まで標語など張ってあった掲示板に「無条件降伏」の文字を見て呆然ぼうぜんとなり、その後のことは記憶きおくがありません。

軍国少女ではありましたが、嘆き悲しむことはしませんでした。これで空襲から解放された。これからは学校にも行ける。出征しゅんしていた兄や疎開そくわいしていた妹も帰って来るだろうと思いました。

## (二) 家族のこと

学童疎開に行っていた妹も元気な顔で帰って来て、父母を安心させました。妹は一番末の子どもでも可愛がっていましたので、その喜びようはありませんでした。

出征していた兄三人の内二人は、ソ聯へ抑留されました。長兄（通尚）は終戦間近に旧満州で現地召集され、終戦後ソ聯へ輸送される途中、列車の中で亡くなったのだそうです。あまり体が丈夫でなかったからでしょうか。

ソ聯の国境に近い北朝鮮の会寧駅の近くに葬って下さったと帰還された戦友の手紙で分かりました。手紙の中には、黒く汚れた兄の爪が入っていました。それを抱いて泣き続けていた母の姿が忘れられません。

戦後二年も経った頃、我が家に白木の箱が届きました。軽い箱の中からはコロコロと石の転ぶ音がしました。

## 一枚の戦死公報はペン文字で

「満州方面にて」と書いてあるだけ

からからと乾きし音は兄の霊<sup>たま</sup>

箱の中から言ひたきは何

それから父は、よくこう呟いていました。

「行きいなれば、朝鮮でも行こうものう。北朝鮮なら仕方がなこうや。」  
言い続けながら思い叶わず七十二歳で他界しました。

通尚兄には、生まれて一年位経った娘がいました。満州に住んでいましたから、突然のソ聯軍の進行により、命からがら体一つで母と子は引き揚げて来る事が出来ました。歩き初めていた娘は、小さく小さくなり、おくるみの中で目ばかり大きかったのを覚えております。二人ともよく帰って来てくれました。

ソ聯へ抑留されていた二人の兄の内三番目の兄（通一）は抑留がシベリア方面ではなかったので抑留者の帰還では早い方でした。珍しい内だったので沢山の人が港で出迎えて下さいました。夏の暑い日でした。

船着き場に所せましと積んであった丸太の上に立った兄は帰還の挨拶をしました。凛々しかった兄の姿を思い出すことが出来ます。



二番目の兄（通行）は、抑留地がシベリア方面だったので、戦後五年も経ってから帰って来ました。皆で夢のようだと言って喜び合いました。よくも命があったものだと思いに感謝しました。

戦地でのことや、抑留生活の悲惨さなど、もっと詳しく二人の兄に聞いておけばよかったですと悔やまれてなりません。残念ながら二人の兄も他界してしまいました。

夫（敬郎）は旧制種子島中学校卒業後すぐ安城国民学校の代用教員となり、その後召集を受け出征したのだそうです。英語が少しでも分かるからと、北九州にあった捕虜収容所に、油久の日高さんと二人配属になったそう。終戦と同時に解散命令が出たので、二人は密かに収容所を離れ、見つからぬ様に歩き続けて、やっと鹿兒島まで辿り着いたと話してくれました。

私は戦後小学校の教員となり「教え子を再び戦場に送るな」を合言葉に、子ども達とむき合い、六十歳で退職いたしました。

その後二十五年、今までに関わって下さった皆さまに感謝の心でいっぱいです。

夫の忌を終へてバイクで帰る息子は

角曲がる時 手を上げて行く

十七歳時父と死列の吾が娘

平成二十七年 還曆を迎ふ

「鬼百合の咲く頃がよか」と亡母の聲

思ひ出しつつ大角豆の種子を蒔く

白和へにしようと野の芥摘み終へて

籠にこぼるる春の香を嗅ぐ

## 終わりに

戦後七十年となり私の戦争体験を思いつくまま書きました。七十年前の記憶なので不確かなところや、間違っていることもあるかも知れませんがそのところはお許し下さい。

戦後の食糧難や住宅難、そして物資不足は種子島でもありました。外地や内地からの引き揚げ者で島は人口が増え、一軒の家に幾家族も住んでいました。

又本土から着物と食糧を換えてもらう人や闇商売の人達も沢山来るようになりました。

食糧は勿論不足していましたが、から芋の種芋にした後の養分の抜けたスカスカ芋も捨てずに食べました。芋の蔓も湯がいて食べ、種子島の芋は沢山の命を救いました。戦争が終わって何はなくても希望を持てる様になりました。新しい憲法が制定され、一人ひとりが人間らしく生きる権利が保障されました。

女は男の下に位置付けられていたのが、人間として平等であるという考えに変わった事は嬉しいことでした。そして選挙の権利が女性にも与えられました。

今まで本音を言えなかった事が、大きな声で言える様にもなりました。

何よりも嬉しかったのは、憲法第九条に戦争の放棄を明記してあることでした。どんな理由があるにしても、戦争だけはしてはなりません。

戦争を知らない世代に変わってしまったおとうとして今、戦争の悲惨さを後世に伝えていって欲しい。今でもテロに怯えて暮らす人々がいます。何時までも平和であって欲しい、そして世界の人々が安心して暮らせる世の中になって欲しいと願いをこめて、私の戦争体験を閉じたいと思います。

最後に、この冊子の発刊にあたり、多大なご指導をいただきました吉原昭保先生、表紙の題字を書いて下さった親友の牧本ツエ子様、旧古田小学校の写真提供をして下さいました原哲三様に厚くお礼を申し上げます。

なお、新生社印刷様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

「戦争の体験」書き終へ目をやれば

庭に真つ赤な草木瓜の花

風の子となりて遊びし野の原に

春の草摘む媪となりぬ

二〇一五年五月



発刊によせて

吉原 昭保

郷土の尊敬する先輩であられる下村タミ子先生が、後世の平和を願ひ、自らの戦争体験を冊子に出版されました。戦後七十年の節目にふさわしいことだとその熱意と行動に深く敬意を表したいと存じます。

先生は、女学校時代正に青春の真っ直中を戦争と言う悲劇の中に生きてこられ、戦後は教師として、郷土の子供の教育に携わってまいりました。教師としての職責を全うするばかりか、文学活動・社会教育活動・スポーツ活動・奉仕活動等あらゆる分野で活動されてまいり、現在もその精力は衰えていません。

文学活動にあつては、私と同じ文学「あかおぎ」の同人であり、短歌結社「南船」社の同人であります。先生の歌は写實的で郷愁あふれる歌が多く、その根底には先生のお人柄と、戦争体験という悲しい時代を生きてきた悲哀の心が自ずと宿っているからだと思えます。

抒情豊かに詠まれた歌には、どこか哀感を憶えます。社会教育にあつては、種子島民話を主にした語り部の会「地炉の会」を立ち上げ、郷土教育・情操教育に努められ、スポーツ活動にあつては、西之表市におけるグラウンドゴルフの発展に当初から努められていて、現在も良きリーダーとして活躍されておられます。その他あ

らゆる奉仕活動に積極的に参加され、下村先生の姿の見られない活動はないと言っても過言ではありません。知識が豊かで温厚な人柄は、誰からも愛され、慕われています。一方先生は、自分の戦争体験から平和な社会への思いが強く、平和教育・平和運動にも積極的に参加されています。その下村先生が戦後七十年の節目に当たる此の年「戦争と私」の自伝を出版されることに接し、万感胸を温かくするばかりか、後世に平和を願う先生の執念に深く敬意を表す次第です。

先生の今後益々のご活躍を祈念申し上げ、発刊の祝文と致します。

元上西小学校校長



## 旧制種子島高等女学校校歌（歌詞）

- 一 うるはしやわがさと すがしき島根  
 あらふうしほの 紺青の  
 さやけきながれ そのかをり  
 吹けよそよ風 礼ふかく  
 たゞしきこゝろ われら磨かむ
- 二 たふとしやおほみよ ゆかしき島根  
 のぼるあさひの くれなるの  
 かゞやくひかり そのすがた  
 澄めよおほぞら 新しく  
 世に立つちから われら鍛へむ
- 三 なつかしやはらから いとしき島根  
 つどふ栄ある まなびやの  
 ましろきいやか そのまどべ  
 咲けよなでしこ つましく  
 日ごとのをしへ われら守らむ



県立種子島高等女学校 正門（現市役所敷地）





## 下村タミ子 略歴

- 昭和5年2月 西之表市中野に生まれる  
昭和21年3月 種子島高等女学校 卒  
昭和22年 島内小学校の教員として勤務  
平成2年 安納小学校を最後に退職

- ・退職後、福祉ボランティア「野ゆりの会」(15年間)、語り部「ぢろの会」の会員として現在に至る。
- ・文学「あかおぎ」短歌結社「南船」の同人
- ・「種子島、九条を守る会」会員

### 「戦争と私」

平成27年5月

発行者 下村タミ子

鹿児島県西之表市西之表 7724

電話 0997 (22) 1715

印刷 (有) 種子島新生社印刷

西之表市西之表 16736-1

電話 0997 (22) 0476

※ 乱丁・落丁がございました場合は、お取り替え致しますので、小社までご連絡下さい。